

ことばとジェンダー：社会言語学の視点から

川崎 晶子 (ジェンダーフォーラム協力委員、立教大学コミュニティ福祉学部助教授)

1. ことばの研究

ことばの研究の中で女性のことばは「女性の使うことば」と「女性に関することば」の二つの視点から研究されてきた。初期には、女性語や女性をあらわすことばというように、女性のみ注目しその特徴を探るものが多かったが、次第に男女比較をしながらの記述になり、違いの原因究明もおこなわれ、社会の中での女性の役割や立場とことばとの関係も議論されてきた。女性が特定の話し方をし、また、女性に関係する表現に特定の意味傾向があるという現実には、ことばの中にその社会での女性の見方やありようが溶け込んでいるからだと考えられている。

今回のジェンダーセッションでは、女性・男性の使うことば、女性・男性に関することば、という基本的な二つの見方にそってこれまでの研究を振り返り、そこから最近気になる身近な事例などを抽出、参加者の実際の言語感覚をもとに話し合い、社会の中でのことばの男女差の実際や変化について考えたい。

1. 1. 女性の使うことば

女性が使うことばについてよくいわれていることは、「丁寧で正しい話し方を好む」、「柔らかい話し方を好む」ということである。その他にも、「意見を言わず質問や相づちが多い」(レイト)などのやりとりの特徴も記述され、そのような特徴がある理由として、女性の力のなさや自信のなさを反映しているから、女性は人間関係を築くため男性は競争のためにことばを使うから、等が論じられている。

大学生の両親を対象にした「いつ行くか」を訪ねる場合に何と何を聞いた調査(井出、他)の結果によると、男性も女性も「近所の人」「父母会の父母」「配偶者の友人」などつきあいを重んじるような人間関係の相手に対しては、この程度丁寧に接しようと思っている以上に丁寧なことばを使い、「部下」「同僚」などの効率を重んじるような場面での相手に対しては、この程度丁寧に接しようと思っているほど丁寧なことばは使わないで「いつ行くか」を聞く傾向があることがわかった。このような焦点を絞ったことばづかひの意識調査結果から、女性が丁寧な話し方を好むといわれる所以が見えてくる。女性はつきあいを重んじ丁寧な話し方をするような場面での発話が多く、だから女性は丁寧な話し方をするという印象を持たれる、という説明が可能になる。

ことばの運用の男女差を発話行為を切り口に見ていくと、日常的にげなく感じていることが明らかに見えてくる。たとえば「誉める」という行為、これには男女差がかなりありそうである。ニュージーランドの研究では、女性、特に女性同士は頻繁に誉めあい、誉めあうことで励まし合い、親密さを表現し仲間意識を育む、と報告されている。日本ではどうだろう。この点に関して、参加者と活発な意見交換ができた。男性の目から見ると、女性同士の頻繁な誉めあいは異常だと思ふほどの場合があるとのことである。社交辞令、し

らじらしい、本当にそう思っていないのに言っているようで怖く感じることもあるとのことであった。女性の中には、自分は挨拶のように誉めるとする人もある一方で、自分はそういう誉め方はしないという人もいた。誉められた方は悪い気はしないとの意見もあった。「挨拶のような誉め」は、女性の特徴というより、特定のキャラクターを持った女性に見られる特徴という見方をした方がいいのかもしれないが、誉めることで共感を示し、親しさを表し、仲間意識を作り出すという言語行動は、男性にはあまり見られないという事は確かなようである。その他の発話行為研究では、女性はよく謝るとする調査結果もある。

話の内容にも男女差が見られる。アメリカ女性は自分の家族や体験など私的なトピックを好み、公的なものにもそれを入れる傾向があり、また具体例を挙げながら議論を進める傾向あるとの研究結果がでてくる。自分自身の言動を思い返すと、フォーマルな会議の席でも個人的な体験の例を出したりする傾向がある。相手に実感を持ってわかってもらうには、個人的な体験は説得力があると思つてのことなのだが、これは女性的なことなのか、個人差なのかよくわからない。

1. 2. 女性に関することば

日常のことばには女性を物として見るなどの社会・文化的な女性観が織り込まれている。また、日常の言動には、社会でこうあるべきというステレオタイプの男性像、女性像を反映したものが各所に見られる。

ことわざや比喩には男女観がかなりはっきり表れ、これは社会的・文化的イデオロギーとしてのジェンダーとして昨年の第26回のジェンダーセッション「箱入り娘」と「粗大ゴミ」(平賀)に詳しい。

学生に「男の子だから～」「女の子だから～」「男のくせに～」「女のくせに～」の「～」の部分を書いてもらつたと、「男の子だから泣かないの」「女のくせに料理もできない」などあつという間にたくさんの例が集まり、また似た例が集まる。親や先生などからよくいわれていた台詞だから、すぐ思い出すとのことである。では、自分が子育てするようになったら同じ事を言うだろうか聞いてみると、「～」の部分は言うかもしれないが、その前の「女の子だから」などの部分は言わないと思うとの返事が多かった。ジェンダーにどっぷり浸かった発言は少しずつ減っていくのではないかと思う。

2. 変化

ことばは思考を反映する、ということは、ことばを変えれば考え方も変わるかもしれない。日常の言語行動に潜む男女差別、女性観・男性観を、ことばを変えることによって変えていこうという運動が活発になされてきた。英語では、chairperson, flight attendant, Ms. 等、運動の結果多くのことばが定着している。日本語でも看護婦の代わりに看護師、保母の代わりに保育士など、行政を中心に新しい呼び名の普及もなされている。絵本や教科書での女性や男性の取り扱い方をなるべくジェンダーフリーにする努力もさまざまなレベルでなされている。

ことばを変える試みは成功する場合も失敗する場合もある。第2次世界大戦後、日本語の施策として、過度な敬語を使わないように、相手と呼ぶのに「あなた」を使うように、というお達しが出た。戦前の上下関係の強い人間関係を、ことばの使い方を変えることによって変えていこうという試みである。しかし、これは実際にはそれほど普及しなかった。まず、日本語では主語を言わないで話すことが多く「あなた」を言う機会が少ないこと、

あなたに代わる様々な呼び方を置き換えてまで「あなた」を使うことに無理があったこと、が原因であろう。ことばはそれほど簡単には変えられないということも事実である。

一方、意図的にことばの変化を求めなくても、実際は社会の変化に連動したことばの変化は各所で見られる。思考が変わりことばが変わっていくのである。夫婦関係や家族関係は戦後かなり変わり、女性の力が強くなったといわれている。それに連動して夫婦の呼びかけ方や言及の仕方が変わってきている。主人・家内、夫・妻、うちの人・うちのやつ、うちの旦那・うちの奥さん、嫁、等々、連れ合いを何とよぶかは現在かなり多様になってきている。その一方で宿六（やどろく）などの味のあることばは、死語になりつつある。

話し方そのものも大きく変化しており、以前は会話を書き取ったものなどを読むと話し手の性別がわかったものだが、最近ではわからなくなってきている。また、女のような話し方の男、男のような話し方の女など、ステレオタイプは存在しても実際の話し手は逆転している現象も多々見られる。中性化、ユニセックス化の方向と、話し方は男女の属性を示すものではなく個性と考える方向への変化である。

3. ことばに見られる男女差

ことばに見られる男女差を研究する意義は何であろうか。まず、ことばの使い方に関して、ユニセックス化は進んでも、男女のことばの使い方の違いはいろいろな面で存在する。男女が分かり合うためには、それぞれのことばの使い方の特徴を知る必要がある。女性（男性）に関することばについては、男女平等がうたわれ女性がのびのびとしてきた現代、変化しながらも、男性観、女性観は我々の心理の奥底にしっかりと根付いているものがあり、それはふとした日常の表現などに顕在化しているものである。ことばの研究から潜在意識が見えてくることもある。

参考文献

- Holmes, J. 1988. "Paying Compliments: A Sex-Preferential Politeness Strategy." *Journal of Pragmatics* 12. pp.445-465.
- 井出祥子 他 1985『女性の敬語の言語形式と機能』 文部省科学研究費成果報告書
- Ide, Hori, Kawasaki, Ikuta & Haga 1986 "Sex difference and politeness in Japanese" *International Journal of Sociology of Language* 58, pp.25-36
- 小池生夫主幹 2003 「1. 4. ジェンダーによるバラエティ」『応用言語学事典』 研究社 pp. 188-195
- 丸山明代 1996「男と女とほめ 大学キャンパスにおけるほめ行動の社会言語学的分析」『日本語学 特集 ほめる』1996年5月号 Vol.15 pp.68-80
- 宮地裕 他編 1993『世界の女性語 日本の女性語』日本語学5月臨時増刊号 明治書院
- ピソ・レイコフ著、かつえ・あきば・れいのるず訳 1990 『新訂版 言語と性 英語における女の地位』 (Robin Lakoff 1975 *Language and Woman's Place* Harper & Row) 有信堂高文社
- 『月刊言語 特集：言語のジェンダー・スタディーズ』 2002年2月号 Vol.31, No.2